

ベンチを活用した切花用隔離栽培システムの構築

【背景と目的】

若者の花離れや贈答用需要の低下等とともに鉢花単価は下降を続け、鉢花を主体とした花き経営は年々厳しくなっている。一方、東京の直売切花栽培は売り上げが堅調であるが、トルコギキョウやナデシコなど一部の切花で立ち枯れ病やセンチュウなどの土壌性病害虫が生産現場で多発するとともに、土耕栽培における定植、芽整理、収穫などの作業時の身体への負担が大きな問題となっている。

そこで既存の鉢花ベンチを活用した切花用隔離栽培（少量培地）システムにおいて、適性のある切花品目を検討するとともに、新規就農者や高齢生産者が安価で、容易に取り組める直売切花向けの隔離栽培システムを構築する。

【研究概要】

- (1) 定植本数や鉢サイズを検討して明らかにした最適な栽培条件で栽培すると、主要切花10品目はいずれも出荷規格を満たす収穫物を生産できるが、特にアスターなど7品目はポット栽培の適性が高い。
- (2) 隔離栽培は、作業姿勢の評価が地植え栽培よりも高く、作業負担を軽減できる。
- (3) アスターのポット栽培では切花ポット栽培に使用した残土を再利用しても切花形質に影響しないことから、1回は再利用できる。
- (4) 農総研で開発した簡易底面給水システムは隔離栽培に適応できる。100m²のハウスにおける1年目の栽培コストは、設備投資を含めて慣行より約47万円増加するが、灌水労力の低減が削減できる。
- (5) ヒマワリの隔離栽培でのベンチ下局所加温は、消費燃料を削減でき、慣行加温と同等の切花形質が得られる。
- (6) ヒマワリとケイトウの隔離栽培でベンチ下ミストをすると、昇温は抑制できるが、生育は促進しない。
- (7) 切花用ポット栽培に適用可能な主要切花10品目のうちケイトウ他7品目が、苗・鉢物からの品目転換によって収益の増加が見込める。